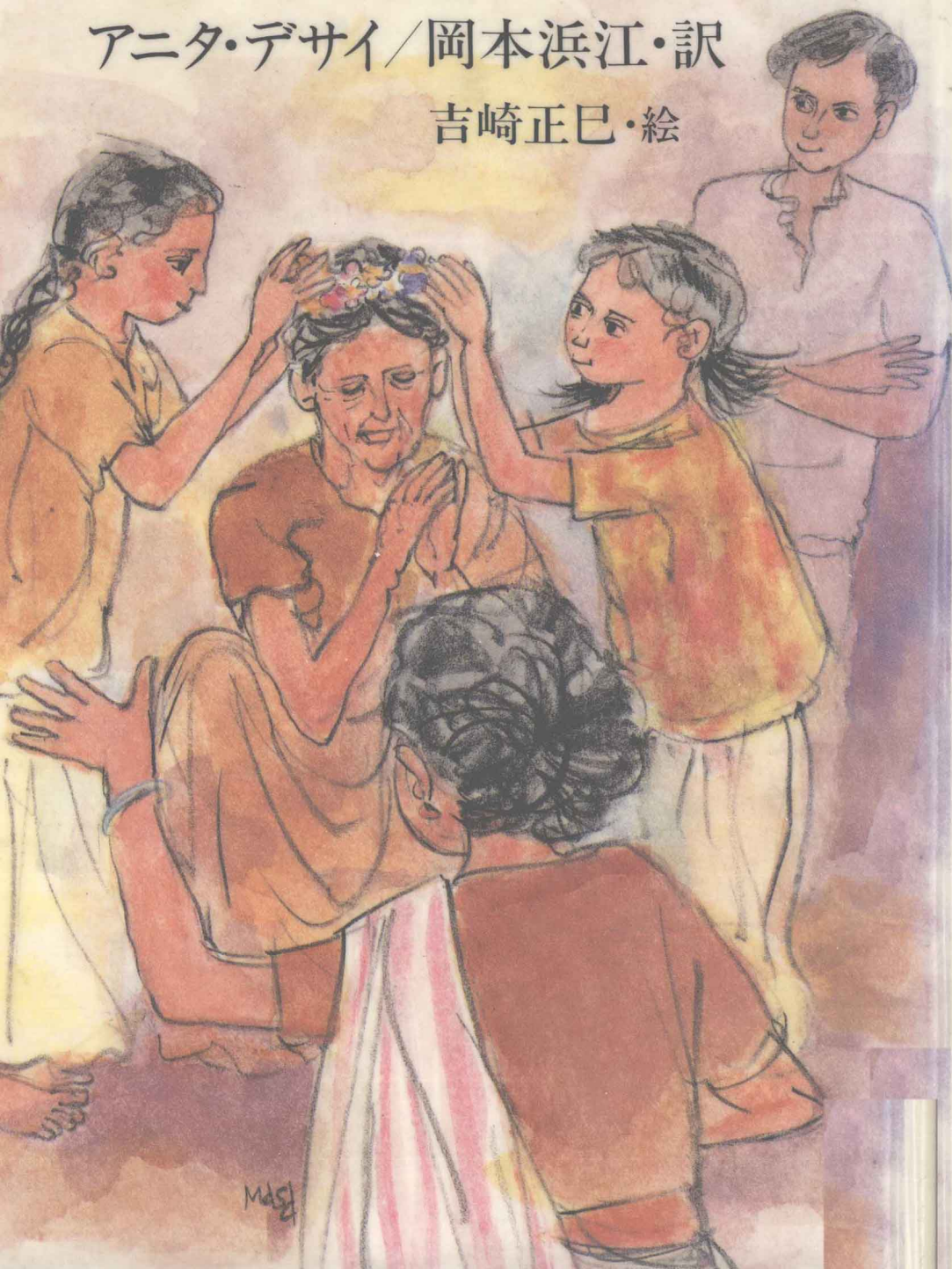


ぼくの村が消える!

アニタ・デサイ／岡本浜江・訳

吉崎正巳・絵





929.8

デサイ、アニタ

ぼくの村が消える！

デサイ作 岡本浜江訳

国土社 1984

243p 21×15cm (現代の文学・2)

ぼくの村が消える！〈現代の文学・2〉

1984年1月15日初版1刷印刷

1984年1月25日初版1刷発行

著者 アニタ・デサイ

訳者 岡本浜江

発行者 長宗泰造

発行所 株式会社 国土社

〒112 東京都文京区目白台1-17-6

☎03(943)3721 振替 東京6-90631

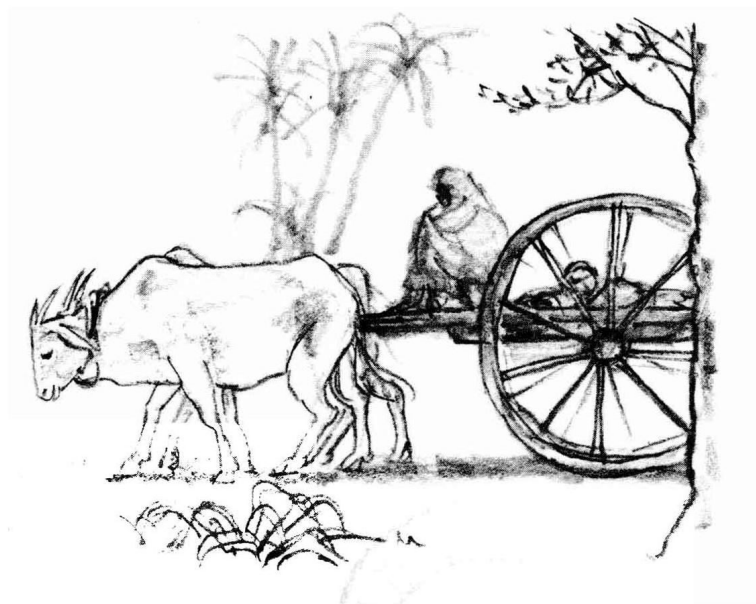
印刷所 株式会社 厚徳社

©岡本 浜江／吉崎 正巳

ISBN4-337-20502-0 C8392

アニタ・デサイ ぼくの村が消える！

岡本浜江訳
吉崎正巳絵



国 土 社

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

THE VILLAGE BY THE SEA

Copyright © 1982 by Anita Desai

Japanese translation rights arranged with

William Heinemann Ltd.,

London through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

この本に書かれていることは、一九八〇年代のはじめ、インド西海岸のトゥールという村を舞台^{ぶたい}にして、ほんとうにおこったことばかりです。

登場人物たちは、みんな実在^{じっさい}の人々^{ひとびと}で、いまもトゥールにくらしています。

ただ、本人たちのプライバシーのために、本名をつかうのだけはやめました。

— 著 者



●ぼくの村が消える! ●もくじ●

1 まずしい小屋 8

2 いくつかの可能性かのうせい 39

3 もうたぐさんだ! 72

4 ボンベイへ 99

5 スリ・クリシユナ食堂

6 モンスーンの季節きせつ 168

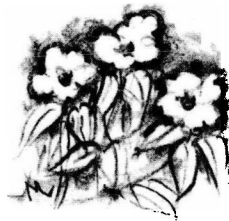
7 海への村 205

あとがき 242

133







訳者・岡本^{おかもと}浜江^{はまゑ}

東京に生まれる。東京女子大英米文学科卒業。通信社勤務を経て、現在は英米文学の翻訳家として活躍。訳書に『若草の祈り』『テラピシアにかける橋』『チャイリー・ムーンの大かつやく』『ポリーの秘密の世界』など多数。

住所／東京都八王子市絹ヶ丘二―五四―一五

画家・吉崎^{よしざき}正巳^{まさみ}

一九一四年、山口県光市に生まれる。第一美術協会常任委員。児童出版美術家連盟会員。主な作品に、絵本『こぐまのぼうけん』『あかてがにのたび』、さし絵に『おてんばとも子とライオン先生』など多数。

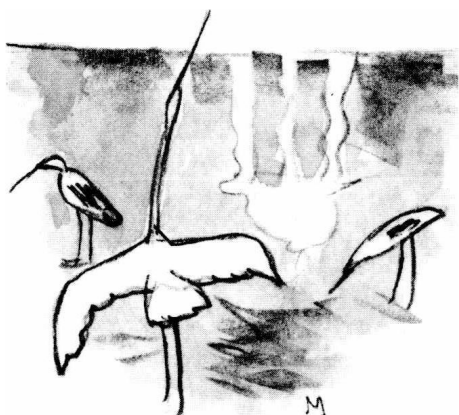
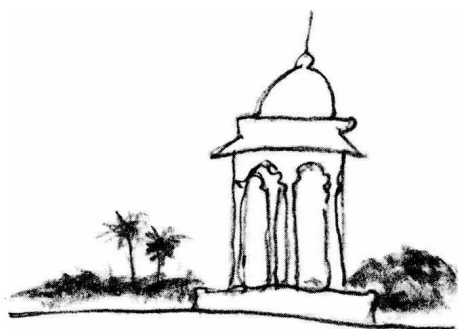
住所／東京都練馬区練馬二―三二―二

装丁 森元 功

アニタ・デサイ／作

岡本浜江／訳

ぼくの村が消える！



まずしい小屋



リラが浜^{はま}べに出たときは、まだとてもはやかだったので、あたりにはだれもいなかった。砂^{すな}は、きのうの晩^{ばん}の潮^{しほ}で、きれいにあらわれ、まだだれの足あともついていない。ただ、水ぎわで魚をおいかけているカモメ、ダイシャクシギ、クサシギのあとがのこっているだけだった。

リラは、片^{かた}方の手のひらに小さなかごをのせて歩いている。かごには家の近くの草原でつんできた、まっ赤なハイビスカス、あまい香^{かほ}りのヒガンバナ、あざやかな黄色のアリアケカズラが、いっぱいにはいつていた。

リラは波うちぎわまでいくと、サリをたくしあげて、腰^{こし}のところにはさみ、足もとにうちよせては、くるぶしでクリーム^{あわ}の泡^{あわ}のようにうずまく水のなかを歩きだした。そして、岩が三つかたまっているところまでいった。

岩の一つに、赤と白のクムクムの粉がかけられている。それは、神さまの岩で、いつてみれば、そこが海のお宮^{まんな}なのだった。満潮^{まんちよう}だと、水につかっているけれど、いまのように干潮^{かんちよう}のときは、き

れいにあらいきよめられている。リラはかごから花をとりだすと、岩のまわりにまきちらし、両手をあわせて、そつと頭をさげた。

ちようどそのとき、浜べに一列にいらんでいるココヤシのむこうから太陽が顔をだし、銀色の砂の上に、長いなめの光線がはしって、リラの頭のうしろをてらした。リラは、ここちよいあたかさを感じ、足だけを冷たい水につけたまま、しばらくじつと頭をたれた。陽の光がピンクがかったフジ色の波をきらきらとゆする。はるか水平線のかなたには、夜どおし海に出ている釣船がひと群れ、白いつばさか、ひれのような白い帆を水面にもたげていた。

しばらくすると、おおぜいの女たちが、神さまの岩に花をささげにきた。たいていは、沖に出ている釣船の漁師の妻や娘たちだったから、船が安全でありますようにというみじかい祈りをささげる。でも、リラのように、ただ神さまにあいさつするだけのものもいた。

この岩は、村の人にとって、ちようど手ごろなお宮だった。これなら、村のはずれにある本ものの寺院へいくより近いし、だいいち、お坊さんに祈禱のお礼をはらわなくてすむ。女たちは、自分たちだけで、お祈りをしたかった。

リラの父さんが、まだ釣船をもっていて、海に出ていたころは、母さんがこの岩に花をもってきては、祈っていた。けれど、もう父さんは釣りに出なくなつて、船は借金のかたに売ってしまったし、母さんは病気で、床からおきあがれないほどよわっていたから、十三歳のリラが一日の

はじめに、海に花をささげにきているのだった。

ときどき、リラは、この時が一日じゅうでいちばんすきな気がした。この時だけが幸せで平和な気さえる。さいごの花びらをかごからあけて、波がすばやくはこびさるのを見とけると、リラはうしろをむいて、何本ものココヤシが金色に色どられてかがやいている浜^{はま}べを歩いた。

リラは、そこにフジ色のヒルガオが咲^さきでている砂丘^{さきゅう}をのぼって、ココヤシのしげみに入り、白いバンガローのまえを歩いた。ここは休みのときだけ、たまにやってくるボンベイの金もちのものだ。ココヤシの幹^{みき}に、ブリキの板がうちつけられ、〈憩^{モシ}いの館^{ルポイ}〉とかいてある。なんという意味だろう？ リラはいつもここを通ると、そう思いながら、ココヤシの林をぬけて歩いた。

朝の陽^ひの光は、まだやわらかくヤシの葉をぬってさし、周囲の家いえのカマドから流れてくる青いまきのけむりと、まざり合った。まだ草の上にはつゆがのこっていて、クモの巣^すもキラキラとひかる。クモの巣^すはみんな小さいけれど、びっしりとぶあつく草についていて、まんなかに通りがかりの小虫をつかまえる穴^{あな}があいている。

草むらや、野生の花のしげみから、チョウがなんびきもとびだした。大きなシマのある体に、かすかに青みがかった羽^{はね}をしたのや、羽^{はね}の先がまっ赤なの、はでな黒いの、小さくて黄色っぽいのが、二ひき三ひきととびまわる。

と思うと、こんどはうつそうとしげっているとがった葉さきのモクマオウや、タコノキのしげ

みから、いっせいに小鳥の群れがとび立ち、一日のどの時刻よりも、にぎやかによびあい、うたいあつては、舞いのぼる。

むこうの枝からは、何組かのとさかのあるヒヨドリが声をかけた。どこか見えないけれど、一羽のオオバンケンが、しげみのなかから、「クーウ、クーウ」と、ひくいおぼけのような声をあげ、ハトのゴロゴロククという声もひっきりなしにきこえてくる。

これが、あらい波音と、ヤシのあいだをいく風の音とともに、このトゥール村の声だった。これをきくと、リラは、またなにもかも昔のように、きつとおだやかで平和になるよ、といわれているような気がした。

けれども、やがて沼の岸にきて丸太の橋をわたり、そのむこうにある、まずしい小屋を見ると、そこにはけっして昔のような幸せも平和もないことを、リラは、はつきりとさとするのだった。

小屋の屋根は、もう何年もふきかえてなかった。古いヤシの葉が、かさかさにかわききつて、梁からぼろぼろと、とれておちる。土かべは、ぐずぐずと、ひびわれている。窓は、雨戸もなく、がらんと口をあけていた。かまどの鍋の下からは、ほかの家いえからのぼっていたようなけむりもあがっていなかった。

ふたりの妹、ベラとカマルが、戸口に立って、うらのインドセンダンから折りとった小枝で、

齒をこすっている。学校へいくのに、まだ顔もあらわず、着がえもしていない。リラが、
「どうして服を着ないの？ 学校におくれるじゃない。」

というと、妹たちは、

「だって、姉ちゃんが、お茶いれてくれないんだもん——おそいよ。」

と答えた。

リラは、かごを戸口にほうりだすと、小屋のなかにはいつて、火をおこそうとした。これは浜へいくまえに、やっておくべきだった。そして水の鍋をかけておけば、帰ってきたときには、わいていたところだ。

でも、なぜか、リラはけさ目がさめたとき、一刻もはやく、海へ逃げだしたかったのだ。浜へ走って出て、海と神さまの岩のまわりに花をまいたところを見るまでは、冷たい灰や、きのうの晩のよごれた鍋を見るのが、いやだった。

リラはいま、やつとたきぎをあつめ、火をおこし、家族のために、お茶をいれる気になった。

リラは、だまってお茶をわかった。くすぶる火にかけた鍋の水に、ひとつまみのお茶の葉と、ひとつまみの砂糖を入れる。三人の姉妹はしやがみこんで、それが煮えあがるのを見ながら、たったひとりの兄弟が、ミルクをもってくるのをまつた。以前は、家で水牛をかっていたけれど、それも借金のかたに売ってしまったので、いまではミルクは、村の牛飼いにわけてもらわなくて



はならない。

三人でしきのうえにすわって、ココヤシ林をぬけてつづく小道を見ていると、やがて小さなしんちゅうのミルク鍋なべをもったハリのすがたが見えてきた。やっとそれだけ買えたのだ。

ハリは、あらいたてのカーキ色の半ズボンとシャツを身につけている。妹たちが走りよって、ハリからミルクをうけとり、リラがほんのすこし鍋なべにそそぎこむと、じきにお茶はわきあがった。姉妹は、熱いお茶を金もののカップにそそいで、インドソケイの木の下あみの網ベッドのところへもつていき、すわってのんだ。

「父さんと母さんは、どうする？」

ハリがたずねた。

「母さんとは、あたしがもつてく。」

リラが答えた。

「父さんは、ねむってるよ。」

ベラとカマルが声をそろえていった。

リラは妹たちをせかして、いつも学校へいくときに着るあい色のスカートと白のブラウスに着がえさせ、ぼろぼろになった教科書をひろってきてやった。ハリは立ちあがって、妹たちを学校へおくってから、帰りに畑へよってくるといった。

リラは、カップにお茶をそそいで、母さんのところへもっていった。とちゅうで、ミルクをすこしよぶんにたした。

戸口のそばのカーテンをあけると、そこに母さんが寝ている。網ベッドの上に、古い灰色になったシーツをしいて、母さん本人もくしゃくしゃな灰色のぼろ布のように見えた。

母さんはながいこと病氣なのだった。どこがわるいのか、だれにもわからない。いたみもなく、熱もないのに、ただ日ましによわっていく。いまではもうおきあがってお茶を飲むことさえできない。リラが頭をもちあげて、カップを近づけ、ごくすこしずつ飲ませてやるしかなかった。

リラは、うすぐらい小屋の片すみに丸くなっているもののほうへ、母さんの頭を向けないように氣をつけた。その小山は、うごきもせず、ただごうごうと、苦しそうなびきをかいていて、とてもくさかった。

リラは遠くからでも、この発酵したヤシ酒のおいをかぎわけることができた。小さいときから知っていて、大きらいなおいだ。

リラは鼻にしわをよせ、父さんはもつとむこうのすみで寝て、母さんの部屋に酔っぱらいのおいをまきちらさないでくれればいいのに、と思った。けれど、だれも思いきってそれを父さんということはできない。とりわけ母さんにはできなかった。

母さんは、ただごういった。